# いづみ

令和6年9月19日発行

真言宗御室派
長泉寺
〒700-0807
岡山市北区南方3丁目10番40号
TEL（086）223-7450
FAX（086）221-0302
振込 岡山 01250-6-6418
ホームページ www.chosenji.net

長泉寺だより 第350号

ひともし

## 道

我が国には、「道」という伝統文化がある。茶道、華道といった芸道、また柔道、剣道などの武道、それら全てが「道」である。神祇信仰は「神道」で、仏教も本来は「仏道」という。

「道」の実践では、練習やトレーニングではなく、「稽古（けいこ）」がその基本となる。稽古とは「古（いにしえ）を稽（かんが）むる」の意で、先人への敬意を以って真剣に取り組むべきものである。よって、稽古はその全てが本番で、手を抜くことができない。礼に始まり礼に終わるのもそのためだ。「道」とは即ち、それを極めることを目的にしつつも、その歩みにこそ本質的な価値を持つのである。

一方、現代社会はどうか？芸事やスポーツのみならず、教育、医療、政治、経済、その全てに求められるのは結果だ。結果がダメでも心を込めて精一杯やった、というのは甘い考えで、結果こそ全てという時代となった。

確かに結果は大事である。ただ、目的のためなら手段を選ばない――結果至上主義もまた危うい。平和という目的のために戦争をし、かつてはそれで原爆をも落としたのが人類だ。結果や目的も大切だが、同時に手段やプロセス、即ち「道」を尊ぶこと――「道徳」がより一層に大切である。

高祖大師は、「成仏」という仏教者の達成すべき目的をその手段にも適応された。仏に成るためには、仏の如く今を生きること。その実践が「即身成仏（そくしんじょうぶつ）」――成仏道であると。（龍）

---

貸切バスで行く 日本清酒の源流をたずねる旅

## 河内国・大和国の寺社巡礼

申込み締切は10月10日まで！

《河内国（大阪府河内長野市）》 天野山金剛寺 檜尾山観心寺
《大和国（奈良県奈良市・桜井市）》 菩提山正暦寺 三輪明神大神神社 東大寺 興福寺

**11月16日（土）～17日（日）**

「日本酒」、「清酒」は、室町時代に真言宗の僧侶がその造り方を発明したことに由来します。それらは「南都諸白（なんともろはく）」、「僧坊酒（そうぼうしゅ）」などと呼ばれ、織田信長や豊臣秀吉などの戦国武将にも愛飲され、今へ伝わっています。
今回は、その原点ともなっている寺社や所縁の場所を巡拝します。詳しくは別途ご案内用紙をご覧ください。 主催：長泉寺杖心会

## 檀信徒精霊総供養

# 盂蘭盆会

八月一日から二週間にわたって、当山より檀信徒各家へ参拝する「お盆行」を実施するとともに、十五日には当山玉佛堂に於いて檀信徒各家精霊合同供養「盂蘭盆総供養法会」を奉修しました。

「酷暑」という言葉でも足りないほど、例年以上の厳しい暑さが続く八月前半となりましたが、おかげ様を以ってお盆の全行程を無事成満することができました。

檀信徒皆様には、いつもご理解、ご協力をいただき有り難うございます。

## 終戦の日

# 平和の鐘を鳴らそう

終戦より七十九年を迎えた八月十五日、当山では毎年恒例の行事「平和の鐘を鳴らそう」が岡山ユネスコ協会の主催によって開かれました。

当行事は、ノーベル賞受賞者たちによって起草された「わたしの平和宣言」を紹介しながら、参加者が交互に鐘を打つことで「平和への祈りと願い」を表現するものです。例年同様、今年も五十名ほどの方々によって鐘の音が鳴らされ、平和の祈りが捧げられました。

また、その様子は各地方報道局にも取り上げられるところとなりました。

## ご先祖萬霊供養

# おせがき行

長泉寺杖心会は八月二十四日、恒例の盆行事「おせがき行」を開催。今年は四国別格霊場八番札所「十夜ケ橋 永徳寺」（愛媛県大洲市）を参拝しました（参加二十六名）。

一行は先ず、「伊予の小京都」と呼ばれ、風情に満ちた大洲市街を散策し、大洲城や臥龍山荘などを観光。昼食後、目的の十夜ヶ橋永徳寺へ赴き、平成三十年西日本豪雨災害での被災から見事に立ち直られた新本堂で「略施餓鬼法」を奉修しました。檀越各家先祖代々精霊、および三界萬霊への供養を捧げるとともに、同寺の三好圓暁ご住職よりご法話を賜りました。

大変暑い一日となりましたが、熱中症対策も取りながら、元気に楽しくお参りすることができました。ご参加いただきました皆様には、ここに厚く御礼申し上げます。

## 白須賀観音夏まつり
## 協賛金 ご芳名 追記

八月以降 敬称略

高取富佐子　有松和男

七月末までにご納金いただきました方々のご芳名は、『いづみ前号（三四九号）』に掲載しております。皆様からの御志に心より厚く御礼を申し上げます。

## 玉佛堂のぼり幡奉納

玉佛堂本尊「玉佛釈迦牟尼如来」を称える「のぼり幡」奉納のご案内をさせていただきましたところ、左記の方々（敬称略）が施主をお勤め下さいました。

ここに厚く御礼申し上げます。

原田清子（穝東町）
山田紀香（国体町）
田中建治（田中）
徳森文之（瀬戸町）

ありがとうございました。

## 灯篭流し

お盆の伝統行事の一つである「灯篭流し」は八月十六日、西川（下石井公園）で開催されました（主催：岡山市仏教会）。

新型コロナウイルス感染症の流行や猛暑の影響で、ここ数年は参拝者が減少傾向にありましたが、本年はコロナ前の人出が戻ってきているようでした。

灯篭には、その一つひとつに各家各人の亡き人への祈りがあります。僧侶による読経の声が響く中、西川の水面に揺れる灯篭のやさしい光がとても美しく輝いていました。

## 寺だより『いづみ』創刊350号に寄せて

『いづみ』創刊350号にあたり、総代として大変喜ばしく思います。

この軌跡は、当山が今ここに至るまでの道のりであり、菩提寺と檀信徒の歴史でもあります。

光研名誉住職、龍門住職、並びに檀信徒皆様に心より感謝を申し上げると共に、当山の隆盛、並びに皆様のご多幸を至心にお祈り申し上げます。

総代長 岩見 徹

## 寺子屋文化講座

第四十七回寺子屋文化講座を九月十日、岡山県立博物館学芸員の岡崎有紀先生を講師にお迎えし開催いたしました。

当山本尊でもある「薬師如来」への信仰をテーマにした今回は、岡崎先生より岡山県内外の薬師如来像を紹介していただきながら、その特徴や歴史を見ていくことで、古来の薬師信仰を学ぶという内容となりました。

岡山では笠井山、芥子山など、薬師如来の信仰を集める霊山があるほか、眼病に霊験があるとされる島根県出雲市の一畑薬師への信仰が深かったようです。

次回は十一月一日、当山檀徒で、岡山市・県の両文化奨励賞を受賞されている朝森要先生（郷土史家）をお招きし「軍師黒田官兵衛―備中高松城の水攻め―」について学びます。

岡崎有紀先生

# 中国洛陽滞在記

役僧　井上弘基

　夏まつりの翌日（七月十四日）、私は光研名誉住職の随行役として中国を訪問しました。今回は、岡山市の友好都市・中国洛陽市との国際交流事業の一環として、名誉住職も副会長を勤める「岡山市日中友好協会」が主催されたものです。併せて洛陽市にある中国最古の名刹「白馬寺」様と当山長泉寺の仏教交流もその目的の一つでした。

　思えば緊迫感が増している昨今の世界情勢において、このような機会が実現できるのも、これまで長年にわたる交流の積み上げがあってこそのものでしょう。随行役を勤めた者として、この四泊五日の旅が日中友好の懸け橋の一端を担う事を願い、稚拙ながらここに滞在記を残したいと存じます。

光研名誉住職（左）と筆者（右）於：竜門石窟

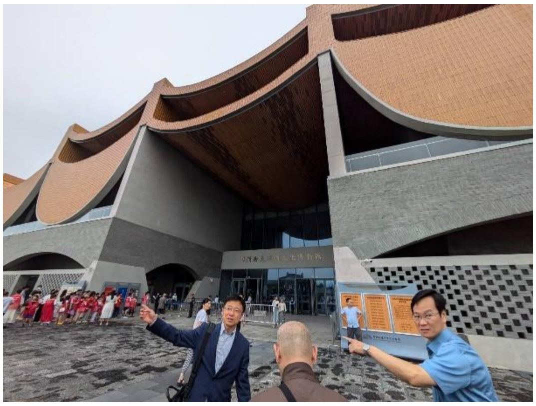
　出発初日、岡山から洛陽への直通便はないため、まず経由地である上海へ向かいました。空港からホテルへと移動するバスの車窓からは、理路整然と立ち並ぶ超高層ビル群が目に入り、さすが中国を代表する大都市、規模が桁違いだなと感じたところです。ただ一歩路地へ入ると景観は変わり、日本人には危機感すら覚える土気色の街並みが所狭しと乱立していました。まさに人の集合地、圧巻の中国を感じた一日となりました。

　翌日の朝、パンとりんご、ヨーグルトを手に、目的地である洛陽へ。洛陽空港へ飛行機が降りると、空港の前には武装した兵士が構えており、日本ではなかなか味わうことのない緊張感とともに到着。

　昼食後、訪問団一行は名誉住職の旧友、方双建氏の案内で世界文化遺産「竜門石窟」を訪問しました。大きな岩肌に無数に開けられた洞窟には一つ一つ丁寧に仏様のお姿が彫られ、そのそれぞれが作られた時代が違うそうです。悠久の歴史とその迫力に驚くばかりでした。老齢を迎えられた名誉住職は、場所によっては車椅子で移動されることもありましたが、竜門石窟の全長数キロの道のりはご自身の足でゆっくりと歩かれました。

　その日の夜、夕食歓迎会が開催されました。洛陽市長も忙しい中駆けつけて下さり、我々の訪中の意義を深く噛みしめていただいているご様子で、「乾杯（カンペー）！」とご発声。我々もそれに応えるように岡山市と洛陽市の絆を表現した「日中友好のうた」（作詞：宮本光研、作曲：松原徹）を披露いたしました。

　洛陽二日目も非常に文化交流に充実した一日となりました。まずは「隋唐大運河文化博物館」で悠久の中国史における運河の有用性について解説を受けました。文明の発達する所、必ず河川有り――単に飲み水の確保だけでなく、交通や運搬の面において非常に有用な意味を持っていたことを学びました。なお、同館は入場無料ですが完全


隋唐大運河文化博物館

洛陽万里茶道博物館

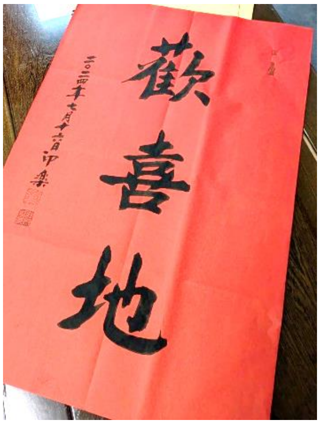
予約制となっているほどに訪問客が多く、この日も大変な賑わいを見せていました。

次に訪れたのは「洛阳万里茶道博物館」です。ここでは琴などの弦楽器の演奏やお茶の接待を受けました。続いて、長泉寺観音堂内の壁画を手がけた王綉先生の牡丹展を観覧。展示されていた貴重な重要文化財コレクションの数々には目を奪われました。

その日の午後、目的の白馬寺様を参拝しました。同寺管長の印樂猊下とは、長年にわたって交流を深めており、檀信徒皆様の年忌法事を勤めている「玉佛堂」前の石碑書も、印樂猊下によるものです。また、玉佛堂のご本尊は白馬寺様より請来された「玉佛釈迦牟尼如来像」です。

名誉住職がお土産の『大日経疏』や根来塗経箱を奉納されると、印樂猊下は非常にお喜びになり、その場において「歓喜地」の書をしたためて下さいました。夜は中国洛陽の伝統名宴「水席料理」をいただくとともに、応天門の夜景を間近で堪能し帰路につきました。大変慌ただしくはあったものの、歴史と文化を肌で感じる有意義な時間となりました。

白馬寺山門




洛陽で過ごす最後の日は「隋唐洛陽城定鼎門遺跡」を見学した後、五十年余にわたって岡山洛陽の国際民間交流に多大なるご尽力をされてきた松井三平氏への「洛陽市栄誉市民授与式」が開かれました。松井氏は、これまでの功績を洛陽市長より直々に称えられるところとなり、大変喜ばしく特別な時間となりました。

以上で全ての旅程が滞りなく完了、と思いきや、最後に洛陽から上海へのフライトが荒天のためキャンセルされるというハプニングに見舞われました。一時は帰国も危ぶまれましたが、松井氏と洛陽市長の取り計らいにより急遽新幹線で大陸を六時間弱かけて横断するという運びとなり、その甲斐あって無事に上海から岡山へと戻ってくることが出来ました。

初めて訪れた中国でしたが、目に映るもの全てが新鮮で、私にとっては非常に貴重な経験となった旅となりました。

ありがとうございました。

光研名誉住職（左）と印樂猊下（右）

## コラム　神仏習合①

今回より複数回に分け、「神仏習合」についてご紹介させていただきます。

現在、お寺と神社は別々に分かれ、仏教と神道も別々の宗教という扱いになっていますが、我が国の歴史を振り返ってみると、仏教が伝来してから明治初期の神仏分離政策に至るまでの約一、三〇〇年間、神も仏も一緒に祀られていました。

意外に思うかもしれませんが、我が国は神仏習合の時代の方が圧倒的に長く、現在のようにお寺と神社が分かれた状態の方が稀な時代なのです。

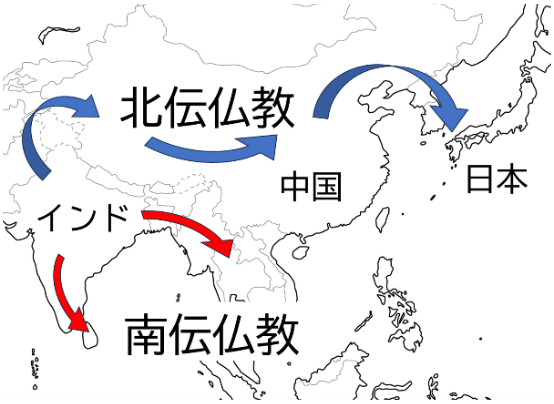
では、「神仏習合」とは一体どういうものなのでしょうか？仏教と神道の歴史を振り返りながら、我が国特有の神仏習合を紐解いていき、併せて現代にもつながる私たち日本人の宗教性についても掘り下げてみたいと思います。

### 仏教の誕生と伝来

そもそも仏教とは、紀元前四五〇年ごろに現在のインドにおいて、釈迦国の王子であったゴータマ・シッダールタ（以下、「釈尊」）という人が佛陀（悟った者）となられたところに始まります。

ご出家、ご修行をされ、三十五歳で悟られた（＝成道）釈尊は、インド各地を説法しながら行脚されます（＝転法輪）。その過程で弟子がどんどん増えていったわけですが、弟子たちは釈尊の涅槃後、その教え（法＝ダルマ）を文字に残すことにしました。それが「お経」です。

お経は弟子たち（＝僧伽）によって数多く書き残され、さらにはその解釈や修行の実践についての研究も進みました。そうすると、その内容に少しずつ違いが生まれていき、弟子たちはやがて部派に分かれるところとなりました。そして、後にスリランカやタイといった東南アジアへ伝わる「上座部仏教（南伝仏教）」と、北方、即ちシルクロードを経由して中国へと伝わる「大乗仏教（北伝仏教）」に大きく分かれました。




中国へ渡った大乗仏教は、儒教や道教などの影響を受けながらも進化を続け、その内容をさらに洗練させていきました。それが間もなく朝鮮半島を経由して、日本へと入ってくることになったのです。

仏教が公的に日本へ入って来た（仏教公伝）のは、五三八年説（『元興寺伽藍縁起』）と五五二年説（『日本書紀』）の二説がありますが、いずれにせよ今から約一、五〇〇年前、仏教誕生からは約一、〇〇〇年後ということになります。

### 日本における仏教の受容

日本へ入ってきた仏教は当初、「蕃神」と呼ばれました。「仏」というよりも「他国の神」として理解されたのです。

そこで、他国からやってきた神様をどう扱ったら良いのか？という論争が巻き起こりました。それはやがて、受容すべきという「崇仏派」の曽我氏、排除すべきという「排仏派」の物部氏が激しく対立し、「丁未の乱」（五八七年）へと発展します。

大和国から河内国を舞台にした激闘は、数百名もの死者を出しました。軍事に長けた物部軍勢に対し、曽我氏側の厩戸皇

聖徳太子像
奈良国立博物館蔵

子（聖徳太子）は、仏に祈るしかないと戦勝祈願をされます。それが実ってか、結果は曽我氏側の勝利となりました。

その後、聖徳太子ら崇仏派は、仏教をただ受容するだけに留まりません。我が国最初の憲法「十七条憲法」に「篤く三宝（仏・法・僧）を敬え」と書き込むぐらいですから、それは「受容」を超えて国家創りの中心に仏教を据えたと言った方が適切でしょう。ところで、なぜ崇仏派は他国の神をそこまで歓迎したのでしょうか？

## 日本元来のカミ（神）

それは、我が国に元来いらっしゃる神様がそうさせたのかもしれません。現在の神道は、伊勢神宮を中心に全国各地に大小様々な神社を持ち、巨大な宗教組織として存在していますが、仏教公伝時の神道はそれと全く違います。

ちなみに神道の根拠となっている『古事記』は和銅五年（七一二）、『日本書紀』は養老四年（七二〇年）に成立しており、仏教公伝より一五〇年以上も後に編纂されたものです。

仏教の伝来以前、縄文、弥生、古墳時代にかけて、我が国は稲作文化が発展していきます。それに伴いムラ（村）からクニ（国）へと共同体も大きくなり、併せて死者の弔いや祖霊崇拝、さらには人間の力が及ばない自然、即ち「カミ（神）」への信仰も醸成されていきました。

吉備の中山にある「元宮磐座」
（古代祭祀が行われていたとされる）

しかし、カミへの信仰が培われつつも教義や組織があったわけではありません。神籬（樹木）や磐座を中心に、天の神や地の神に対して稲作の無事を祈るという原始的な形、純粋なる神祇信仰があったに過ぎないのです（神道ではそれを「古神道」と呼びます）。

## 飛鳥・奈良時代の仏教の展開

大陸からはるばるやってきた仏教は、言わば宗教的に無防備だった我が国に絶大なインパクトを与えました。その洗練された教義や仏像類はもちろんのこと、政治思想や文化にいたるまで、「国家観の一大パッケージ」とでも呼べるような膨大な内容を持ち合わせていたのです。したがって、太子ら崇仏派による仏教の受容は、仏を信仰するということを超えて、仏教に基づくパッケージ化された国家観を我が国へ導入した、ということでもあるのです。

そして奈良時代になると、太子と同じく仏教に深く帰依された聖武天皇が、国分寺・国分尼寺建立の詔（天平十三年・七四一）を出され、さらには東大寺盧舎那仏開眼法会（天平勝宝四年・七五二）を開かれるなど、仏教は国家政策として大きく展開されていきます。

一方でその間、日本古来のカミはどうなっていたかと言うと、決して仏教に排除されたわけではありませんでした。むしろ仏とともに存在し、後に全盛を迎える神仏習合への種火を静かに灯し続けるのでした。

（次号へと続く）

# 長泉寺 寺子屋 文化講座

Vol.48

**11月1日(金)19:00～20:30 於 長泉寺本堂**

参加無料・要事前予約 TEL:086-223-7450

参加ご希望のお方は、事前にお電話でお申込み下さい。

「軍師黒田官兵衛 －備中高松城の水攻め－」

講師:朝森 要 先生 方谷研究会会長

## ◇◆◇◆◇◆◆◇◆ 長泉寺文化教室 ◆◇◆◇◆◆◇◆

| | |
|---|---|
| 長泉寺合唱団ナーガ | 第2,3,4月曜 10時～12時 |
| 金剛流御詠歌会 | 毎週火曜 10時～12時 |
| 御室流華道教室 | 毎月1回 |
| 写経会 | 毎月8日、21日 10時 |
| 書の会 | 毎月1回 |
| 将棋クラブ | 毎月1回 |
| 寺子屋文化講座 | 隔月1回 |

◇◆◆◇◆◇ お気軽にお問い合わせください ◇◆◇◆◇◆

永代供養「楽陽廟」合同追悼法会

# 春秋祭

11月21日(木)10時～於 王佛堂

ご縁のある御方には、お繰り合わせご参拝下さい。

## 霜月大師ご縁日

9:00 大師縁日法会

11:00 安らぎの塔 平和祈願法会

併修「長泉寺文化祭」

## 将棋クラブ

毎月一回 客殿で開催中

参加無料

■76回目

9月29日(日) 13:30−16:00

■77回目

10月26日(土) 13:30−16:00

いつも集まったメンバーで楽しくやっています。どなたでもお気軽にご参加ください。

## 薬園山長泉寺 YouTube チャンネル

ができました

開設したばかりなのでまだ動画は少ないですが、今後様々にアップロードしていければと考えております。

右 QR コードを読み取っていただくと御覧いただけますので、ぜひ一度ご覧ください。

薬園山長泉寺 YouTubeチャンネル

**長泉寺の公式ホームページをぜひご活用下さい** 長泉寺 南方 検索

住職のブログ、月行事日程、文化教室のご案内など長泉寺の様々な情報がご覧になれます